No.39 学校図書館司書だより
2021年3月

FROM－0歳プラン2は美濃加茂市の子どもたちのための教育プランです

図書館クイズ：
美濃加茂市の推薦図書・本は友達３年生の絵本（教科書に載っている）である「モチモチの木」の登場人物は何人ですか？
①　５人　②　２人　③　３人

わたしと読書

本の世界が開く

榊間　月絵

高い空の上から野原や町のさびしい景色をのぞきこんだことがあると思っていた。

いつ本当にそんなことがあったのかなあと長年思っていたが、やっとわかった。それは、子どもの頃読んだ本の情景だった。『北風のうしろの国へ』―三年生の誕生日にもらった初めての分厚い物語の本だった。久しぶりに実家の本だなで見つけ、懐かしくページを繰ってみたら…

ああここにあった…あのさびしい景色は、北風と出会った無垢な少年ダイヤモンドを通して私が見たものだった。にこにこと単純に元気に生きていた私は、貧しさや悲しさを知り、尊い行いがそれを超える存在であることを心に刻んだのだろう。知らないうちに、私を中心で支えているものになっていた。

母は、誕生日やクリスマスに、新聞の書評で紹介されている本を書店に注文して買ってくれていた。母がそれらしきところをメモしているのに気付いたときから、楽しみは始まっていた。…どんな本だろうな…姉もおすそ分けで一冊もらうので、それも合わせて合計二冊読める。（自分の本と姉の本とでは、思い入れは全然違うのだが）

待ちに待って迎えた日、早く早くと大騒ぎしていても、包みは丁寧にあける。一人でゆっくり読む。本の世界が開いていく。一ページごとの絵を今でも思い出せる。

楽しく遊んだ後、鶏小屋で震えながら眠った『こねこのぴっち』の心細さ。本当にかわいがっていれば、ぬいぐるみもほんものになれることを知った『ビロードのうさぎ』。友達とさよならした後の夕方、よくその主人公になりきって遊んでいた。

知らないところで迷子になった時も、たった一人で山小屋まで上って大きな鈴をとってきたウルスリのことを思い、平気だった。（『アルプスのきょうだい』）

『九月姫とウグイス』は特別な一冊だった。毎日、九月姫の気分で過ごしていた。凛とした姿勢で静かに人の幸せを願っていた。いじわるなことを言う人はみにくい姉さんのお姫様に見えた。ああすてき！人の言うことに惑わされないで、自分で考え、潔くつらぬくことこそ美しい。仲良しの友だちには、こっそり教えてあげた。私は九月姫なの、と。あれからずっとそう考えていたように思う。

自分が過ごした時間が年輪のように積み重なって今の自分がいる。本の世界は、自分だけではできなかった素晴らしい体験をたくさんさせてくれた。

「本の世界が開いたら、読まずにはいられないね。」

そんな話を大人になった娘としていると、よくよく覚えているのは『エルマーのぼうけん』だと言う。トラがチューインガムを食べるところは、こわくて面白かったし、棒つきキャンディーはおいしそうだったな、と話しながら、「確かに、あのお話のおかげで、冒険みたいな楽しい遊びがずっとできたし…よく考えると、後々学校でクラスに問題があったときも、なんか技（わざ？）みたいなものを思いついて、あきらめずに、解決できたり盛り上げたりできたのかもしれないな。」と言う。

人生の楽しみをテレビから分けてもらわない子育てをしようと決めて、テレビなしの生活をしていた我が家の子どもたちは、とにかくよく遊んだし、本もそこそこ読んでいたと思う。もちろん、いろんな本を読み聞かせもしてきたのだけど、くやしながら（？）『エルマーのぼうけん』は、保育園のお昼寝の時間に先生が読んでくださったものである。みんなでおふとんに寝転がりながら、だんだん眠くなっていく心地よさと先生の声は、特別な経験をくれたのだろうなと思う。キャンディーの味もいっしょに、一生の宝物をくださった。

いつの、誰との、どの時間の、どの本がそうなるのかわからない。けれど、きっとそこらじゅうに機会はころがっていて、それは大人がしてあげられる最大の価値ある贈り物なのではないかと思う。テレビやゲームは、楽しみを大量にどんどんくれるけれど、心の深いところに残る経験はさせてくれない。だから、子どもの貴重な時間に、本の世界を開いてあげたい。

子どもに読書を強制するのではなく、本やお話のもつ楽しさをいっしょに味わい、その喜びを直接体験させることで、本と親しむ自発的な意志を育んでやることができる。それだけあれば、自ずから本の世界は開いていく。

さあ、今日、読んであげよう。

榊間月絵さんは美濃加茂市学校司書として十五年間、美濃加茂市の子ども達に本の世界を開き続けてくださいました。相棒はかえるのぴょんすけ。七色の声を使って本の世界を開きます。文中の『北風のうしろの国へ』は新訳にて、現在も岩波少年文庫より出版されています。

読書タイム

のぞみ教室と本

初期適応指導教室「のぞみ教室」は古井小学校の体育館の南側にあります。「のぞみ教室」は、初めて日本の学校に入る小学校一年生から中学校三年生までの外国人の子ども達に学校生活・日常生活に必要な日本語や日本の文字、算数（数学）を教える教室です。子ども達は自分の国には無い、たくさんのルールに戸惑いながら三種類の文字（ひらがな・カタカナ・漢字）を覚えていきます。彼らにとってはこれらの文字は未知の世界。最初は絵を描いているつもりで文字を書いています。

のぞみ教室の廊下に設置してある本棚には授業が終わると何人かが本を選びにきます。いろんな絵や写真をみて「ワー！」と驚いたり「見せて、見せて。」「見て、見て！」と楽しそうに見ています。

ある程度ひらがなが読めるようになってくると、音読を始めます。はじめは慣れない文字も徐々に読めるようになってくると、最初は絵を見るだけの絵本もそのうち読めるようになります。まだ意味が分からなくても、「ミッケ」などは一緒に読んであげたり意味を伝えたりすると喜んで探したりします。このようにモノの名前がわかるような本は日本語を覚えるのにとても良いと思います。

のぞみ教室の本棚には、絵本の棚と辞書の棚があります。辞書は漢字の勉強をする時に使われています。漢字の意味を調べたり、漢字で書いた言葉は母国語ではどんな意味かを調べたりします。和英、和葡（ポルトガル語）、和西（スペイン語）、和中などの辞書をいくつか常備しています。

読み聞かせも時々やります。言葉はあまりわからなくても、黙って、じっと本のほうを見つめて先生の話を聞いています。面白い場面があると、「わー！ゲラゲラ！」と歓声をあげたり、笑ったりする時もあります。生まれた国が違っても子どもは絵本が大好きです。

のぞみ教室にある絵本は、ほとんどがスタッフみんなの持ち寄ったものです。今後も絵本の数を増やしていきたいと思います。

この本読んでみて！

えほん

アイヌのむかしばなし　ひまなこなべ
萱野茂/作　どいかや/絵
あすなろ書房出版社 ¥1,400+税

アイヌの人たちは山や川や星や太陽、動物や植物、人間が作った道具などあらゆるものに魂が宿っていて、それらはみんな神（カムイ）だと信じていました。ある日のこと、熊の神は踊りがすばらしく上手な若者に出逢い…物語の中に大切なメッセージが込められたアイヌの昔話。

Y.H

物語

ケイゾウさんは四月がきらいです。
市川宜子/さく　さとうあや/え
福音館書店 ¥1,300+税

ケイゾウさんは幼稚園の庭に住むにわとり。遠足、工事、かけっこ、どんぐりなどきらいなものがいっぱいあります。四月、うさぎのみみこがケイゾウさんの家へやってきました。新しい出会いにとまどうケイゾウさん（笑）。

ケイゾウさんとみみこ、幼稚園の子どもたちとのやり取りがとっても面白い一冊です！

M.O

大人むけ

思春期の子どもとどう接するか
大切な親子コミュニケーション
高　賢一/著
北國新聞社 ¥1,000+税

本書は、北國新聞に連載されている『高賢一の実践親子塾』を書籍化した本です。多くの親が悩んでいる子どもの事柄に対し、どのように子どもと向き合っていけば良いのかわかり易く答えられています。

親子だからこそ、言葉がとても大切だと痛感します。

K.A

小説

アハメドくんのいのちのリレー
鎌田　實/著　安藤俊彦/画
集英社 ¥1,800+税

イスラエルとパレスチナでは何十年も争いが続いている。爆撃や自爆テロに巻き込まれ多くの命が脅かされている。12才のアハメドくんも犠牲となったが、身体の一部と平和を願う心は敵国の子ども達に受け継がれました。

私達は平和のために何ができるでしょう？

C.H

＊このコーナーで本を紹介しているのは、市内の学校司書３人と東図書館司書です。＊

☆図書館クイズの答え☆③3人（豆太　じさま　医者様）
2021 年は斎藤隆介の物語と滝平次郎の切絵による絵本「モチモチの木」「花さき山」刊行 50 周年。半世紀以上愛され続ける絵本たちです。